

S3-1

学校における貧血検診の現状と今後の展望

前田 美穂

日本医科大学小児科

はじめに

小児の貧血は思春期女子と乳児期後期に多いと言われている。今回は学校検診の一環としての思春期、とくに中学生、高校生に多い鉄欠乏性貧血のスクリーニングのために、われわれが行ってきた50年にわたる貧血検診を中心に、現在の状況、そして今後の展望についてまとめた。

貧血検診の現状

学校検診での貧血検査は、平成6年の学校法の改正で必ずしも血液検査が必要ではないと定められる前には、多くの中学生、高校生が血液検査による貧血検診を受けていた。われわれが協力をしている東京都予防医学協会が貧血検診を開始して今年で50年になる。受検者は平成6年には中学生、高校生に限ると約7万人であったが、平成26年は3万人に減少した。貧血の診断は、現在も昭和61年に作成した学年別、男女別の暫定ヘモグロビン基準値により行っているが、貧血と診断される割合は、徐々に増加しており、最近ではヘモグロビンが基準値以下の生徒は中学2年生以上の女子では8～15%となっている。さらに男子中学生で貧血と診断される生徒の割合がやや増加してきている。高校生になると貧血と診断される生徒は以前と変わりなく全体の2%前後であり、ほとんどの生徒はとくに治療をせずに高校生になると正常値になるということは、判定する基準値に問題があるのではないかと考えられる。これについては、最近体重が全体的に減少しており、この傾向は男子にも顕著に見られることや、外見上の発育も中学生では同学年の中でも個人差が大きくなっているようであり、現在男子における貧血の基準値の見直しを行っている。とくに今までの判定基準は学校検診ということから学年ごとの基準値を設定していたが、今後WHOのように貧血のヘモグロビンの基準値を年齢別にした方がよいのではないかと考えている。

考察

中学生、高校生女子の貧血の増加に関しては、現在までの多くのデータにより、月経による血液(鉄)の喪失だけでなく、近年はダイエットによる鉄摂取の低下などによる鉄欠乏性貧血が主な原因である。貧血を増加させないためには、確実な方法で検査を行い、その結果による指導や治療が必要であろう。男子の場合は、貧血検査のヘモグロビンの基準値を改訂し、現状に即したに貧血の診断を行っていくことが必要と思われる。中学生、高校生全員に血液検査による貧血検診が必要というわけではなく、費用対効果や貧血を有する生徒の年齢分布や性別などを考慮して、中学2年生以上の女生徒を中心に貧血検診を推進することが望ましい。男子および中学1年生の女子は養護教諭などが生徒の健康状態を十分に把握し、必要な生徒を選別して検診を受けさせるなどの方法がよいのではないだろうか考える。